市川のまち 地名の由来

No.19

湿地(スワ)を利用した水田

須和田

「スワ」の地名で最もよく知られているのは、長野県の諏訪湖と、そこに発達した諏訪市ではないでしょうか。スワとは、元来湿地を意味した言葉で、スワのつく地名は、全国に多く散在しています。「諏訪」も「須和」も当て字で、本市の「須和田」の場合も「諏訪」の文字が使われた時代がありました。スワが湿地であるならば、その湿地を開発して水田にしたのが「スワダ」ということになります。市川の「須和田」の起こりも、このことに由来していると思われます。

本市の須和田の台地は国府台に続き、向かいあった国分の台地との間には谷津が深く入り込んでいます。その谷津の奥が「じゅん菜池」で、そこから流れ出ている川が「平川」です(今は暗きょになっています)。そして、須和田の台地から国分の台地へ向かう路上の平川に架けられた橋を「石橋」と言いました。

昭和四十二年、この石橋の北側の水田だった地域(現在の国分三丁目一番)を宅地造成したおり、多量の木杭などとともに、弥生時代の土器片が出土しました。その後も、この谷津からは木製のスキや銅製のクワの先などが出土しました。

当時の水田耕作は、実に大変な仕事でした。稲がよく実ることを祈願して神々に祈りを捧げたことでしょう。その祈りの対象として造られたのが、「夫婦石(陰陽石)」であったと思われます。江戸時代に刊行された「江戸名所図会」には、石橋の際に鏡石があったことを図入りで載せています。そして、この鏡石について、「真間の弘法寺より国分寺へ行くかたの田のくろ石橋の際の水中にあり、この石根、地中に入ること其のかぎりを知らず、故に一に要石ともなづくといへり」と説明しています。

また、大正十二年刊行の「東葛飾郡誌」には、「鏡石の西北、凡そ二間(三・六メートル)ほど離れた水田の中に夫婦石があって、石を堀り出そうとすると血の雨が降る」と書いてあります。鏡石にしろ夫婦石にしろ、当時の人々の豊作祈願の対象物として造られたもので、動かしてはいけない存在であったことを物語っています。

スワを開発した人々の生活した場所が、今日「須和田遺跡」として知られているもので、須和田公園から二中にかけた一帯なのです。

写真は、「江戸名所図会」に描かれた鏡石。

次回は「鬼高」を予定しています。

(社会教育指導員・綿貫喜郎)